

学校現場との協働による児童作文指導の基礎的研究

富士原紀絵（お茶の水女子大学 人間文化創成科学研究科 准教授）

○研究の背景と目的

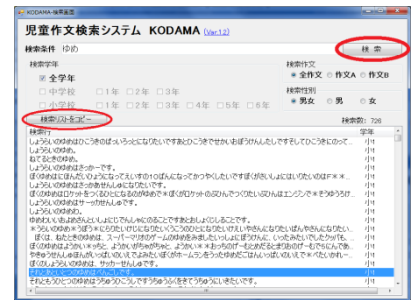
今日、日本の学校教育では児童生徒の表現力とりわけ言語能力の育成が重視されている。言語能力には話す、聞く、書くという側面があり、中でも児童生徒に感じたことや考えたこと、自分の意見を書く活動などが盛んに取り入れられている。日本の学校現場で代表的な書く活動は作文であり、作文における表現の正確さは国語科の指導と密接に関連している。

ところで、児童生徒の作文能力の発達の実態を正確につかめねば、時宜を得た適切な指導方法は確立できないであろう。しかし、こうした作文指導のあり方を検討する上で前提となる条件を満たす、現代の児童生徒の言語環境の実態に応じた基礎資料が存在していない。

こうした現状に 대응べく、本研究では①基礎資料としての「小・中学生通年作文コーパス」（以下、「**児童作文コーパス**」）の作成と、②それを用いた児童の作文能力の実態の解明、③基礎資料の提供に基づいた現場教師との作文教育に関する交流を通して、今日求められる子どもの言語能力の伸長に寄与する作文指導の実践を提案することを目的として行われた。

○研究方法

コーパスとは「**言語を分析する際の対象となる、文字で記された資料や録音された言語資料の集合体**（広辞苑より）」である。本研究でのコーパスは児童生徒の作文である。ある小・中学校の9学年分の作文を春期と秋期の2回、約2000編を収集した。9学年とも同一題目を指定し、春は「ゆめ（夢）」、秋期は「ぼくの/わたしががんばったこと」である。他のコーパスとの違いは、統制した条件下で書かせることで、児童生徒の言語発達のそのまゝの状態を映し出した「生の産出文」を収集したことである。すなわち、執筆中に辞書も使用せず、書いている途中でも決められた時間内で提出させている。作文に教師や保護者の手が入られていない状態で確実に回収している。



収集した作文は、生の状態を保持させることに細心の注意を払い、個人情報保護の観点から踏まえつつ、精緻に電子化した。電子化後、専用の検索システム KODAMA（上の写真はシステムの一部を示したもの）を作成し、これを利用して研究者による分析が加えられた。また、この検索システムを CD-ROM 化し、調査対象校の国語担当教師に紹介し意見交換を行い、今後の研究に関する示唆を得た。

○研究の成果

本研究で作成したコーパスの規模は約50万形態素と既存の作文コーパスと比べてまったく遜色のないデータ量を確保している。さらに、調査対象である児童生徒の均質性や義務教育課程の全体を漏れなくカバーしている点、同一の児童生徒に対して年2回の調査を行うことで、個人レベルでの作文能力の発達を追跡することが出来る点で、既存のコーパスにみられない特徴を有している。

そして、実際に検索システムを活用した事例研究を行い、検索システムの使用法と合わせて『**ことばのこえ—児童作文コーパスの構築と活用—**』というパンフレットを作成した（全14ページ。左の写真は表紙）。事例研究として、語彙発達の観点による「児童作文の接続詞」研究、文字表記の発達の観点による「児童作文の漢字」研究、文章表現力の発達という観点による「児童作文の感情表現」研究の3つの研究を成果としてまとめている。



○今後の課題

本研究では3つの観点からコーパスを利用した児童生徒の作文能力の実態研究を行ったが、十分活用出来てはいない。今後、本コーパスを利用して、より様々な角度から児童生徒の作文の能力の発達を解明する研究を進める必要がある。

*本研究の共同研究者：富山大学人間発達科学部 准教授 宮城信、日本女子体育大学スポーツ健康学科 専任講師 松崎史周